

言語文化教育素材としてのテキスト種ウィット

— ウィットに見るドイツ語文法 —

植 田 康 成

【キーワード】 テキスト種ウィット、ウィットの落ち、ドイツ語文法学習教材としてのウィット、語学教材としてのテキスト種ウィットの可能性

0. はじめに

本論文の目標は、ドイツ語学習素材という観点からテキスト種ウィットを捉え、各言語レベル（音韻、形態、統語、意味、語用）に従ってウィットのテキストを分析し、テキスト種ウィットを素材とするドイツ語授業の展開とその取り扱いの可能性について考えていくことにある¹⁾。

言語文化教育素材、具体的にはドイツ語圏の言語文化に関する学習素材としてのテキスト種ウィットに関する考察の目標は、第一義的には、そのための資料を提供することにある。第2には、ウィットの言語的特徴について理解することである。

文法学習、意味学習を促す素材としては、これまでもドイツ語授業においてウィットのテキストは投入されてきている。ウィットというテキストが潜在的に備え持っている笑いを誘発するという要素が、素材として取り上げるときの判断に大きくあざかっている。ドイツ語学習を可能な限り楽しいものにしたという願いが動機となっている²⁾。

テキスト種ウィットとドイツ語学習項目の関係については、3つのケースがあり得る。1つは、学習項目（たとえば動詞）がウィットのテキストに出現しているものである。この意味では、どのようなウィットのテキストも素材となり得るし、そのような意味でテキスト種ウィットは従来学習素材として利用されてきている。もう1つは、テキスト種ウィットの落ちそのものが学習項目に関わっているものである。例えば、動詞の活用形そのものがウィットの落ちとなっているものである。3つ目は、学習項目が落ちとなっても、その学習項目自体が明示的にはウィットのテキストには出現せず、ウィットのテキストの展開、構成そのものの枠組み、あるいはプロットとなっているものである。

本論文で取り扱われるテキスト種ウィットは、ウィットであるということだけでなく、ウィットの落ちそのものが学習項目となり得るものである。すなわち、上で述べた2つ目と3つ目の部類に属するテキスト種ウィットをウィット集から選択して、考察の対象としている。その点に、本論文の提案の新味と独自性があると考えている。

1. テクスト種ウィットに見るドイツ語の正書法

ドイツ語は発音と綴りのずれがそれほど大きくはない。ほぼ書かれたとおりにローマ字式に発音すればいい。ただし外来語、その多くはフランス語であるが、これは例外である。綴りを間違えると、いうまでもなく違う語となる。正書法は、発音の問題にもつながる。

Der Jäger hat sich für die Jagd einen Schweißhund gekauft. Es war ein Reinfall. Der Hund taugt nicht, und wütend schreibt der Jäger an den Händler, einen gewissen Herrn Schindler. "Sehr geehrter Herr Schindler! Das 'w', das im Namen Ihres Schweißhundes zu viel ist, fehlt in Ihrem Namen! Hochachtungsvoll...!" (Dietl 1986: 21)

このウィットは、内容の点からいうと、暗示のウィットである。役立たずの猟犬をつかまされた猟師は、シンドラーとかいう動物商に手紙を書いた。「猟犬の名前には余計に入っている 'w' が、貴方のお名前には欠けていると思われます。敬具」というのが手紙の内容であった。猟師のことは通りに文章を読み直すならば "Schweißhund" (ブラッドハウンド) は "Scheißhund" (糞犬)、「Schindler」(シンドラー) は "Schwindler" (詐欺師) となる。猟師の言葉遣いは一見非常に穏やかである。それだけにその遠回しの非難は、いっそうの怒りと皮肉を含んでいる。

2. テクスト種ウィットに見るドイツ語の音韻論

2.1 発音

Ein Japaner verlässt die Bäckerei. Unter jedem Arm hält er eine Blondine. Was hat er bestellt? "Zwei Blödchen, bittesehl!" (Kunsmann 2003: 67)

/r/ と /l/ の音を峻別して発音することは、日本語を母語とするものが一番苦手としている。これはあまねく知られている。日本人の下手な発音を笑いの対象とし、落ちとしているウィットも少なくない。

音素は、意味を区別する最小単位である。意味を区別する機能を担っている音を明確に発音しなければ、意味の取り違えが生じる。/r/ についていえば、巻き舌で発音するか、のどびこをふるわして発音するかは、意味を変えてしまうわけではない。一つの音素の異音ということである。しかし、/l/ と発音してしまうと意味が変わってしまうのである。

本来は "Brötchen" (プチパン) を買ったかったのに、/r/ を /l/ と発音してしまったため、とんでもない (!?) 買い物 (ブロンドの女性) をしたというウィットである。しかし、"Blödchen" がなぜ「ブロンドの女性」となるのか。理由は、このウィットがいわゆる「ブロンドの女性」に関するウィットであるという点にある。すなわち、現実とは無関係に、ウィットという虚構の世界では「ブロンドの女性」(Blondine) = 「おばかさん」(blöd) ということになっているのである。

2.2 アクセント

Brösel stiert aus dem Fenster: “Die Vögel fliegen in Formation in den Süden.”

“Du spinnst!” tönt seine Frau hinter ihm, “Informationen werden doch mit dem Fernschreiber durchgegeben!” (Bornheim 1983: 279)

書記で表すと “in Formation” と “Information” という具合に、2語と1語に書き分けられるが、実際の音声では “Information” に限っていえば、“...tion” にアクセントが置かれるか、“In...” にアクセントが置かれるかによって、“in Formation” と “Information” の区別がなされている。その区別を曖昧にすると、意味が取り違えられることになる。ブレーゼルは「渡り鳥が “in Formation” (列をくんで) 南に飛んでいく」といったのに、奥さんは、「鳥たちが “Information” (情報) を南に運んでいく」と理解したのである。奥さんはブレーゼルに向かって “Du spinnst!” (そんな馬鹿な!) と言っているが、自分が聞き間違えているかも知れないとはつゆほども思ってもいないようである。

2.3 イントネーション

落ちが、イントネーションに基づいている場合がある。どの語を強調するか、どのような抑揚で発話するか、といったことで、落ちが構成されている場合である。ウィット集を読むという形で享受する場合は、言語表現の音声実現形式を再構成できなければ、落ちは理解できないことになる。

“Als ich dich heiratete, war ich ein schöner Trottel”, sagte Ulli zu seiner Frau. “Stimmt nicht”, gibt die zurück. “Schön warst du nie.” (Kunschmann 2003: 102)

このウィットの落ちは、“schön” という語の曖昧さにある。しかし、“schön” が「立派な」という反語的に強調された意味を持つには、しかるべき抑揚、アクセントを伴って発話される必要がある。そうでなかったからこそ、ウリの奥さんは、言葉通りの意味で理解し、「一度も立派だったことなどなかったわ。」と言いつけているのである。もちろん、夫であるウリの発言中にある “schön” という語が持つ反語的な意味を理解した上で、あえてそれを無視して、言葉通りの意味で理解したように言いつけているということも考えられる。

2.4 ポーズ

Kennen Sie das Gegenteil von Frühlingserwachen? Nein? Abends rechts einschlafen!

(Bornheim 1983: 475)

ウィットが笑いを誘いだし得るかどうかは、何が語られるかだけでなく、どのように語られるかに大きく依存していることを示しているのが、このウィットであるといえる。印刷する場合には、ブランクで表されることになるが、実際に語られる場合には、ポーズがおかれること

になる。このウィットの落ちは、まさにそのポーズをどこにおくかにかかっているのである。“Frühlingserwachen”（春の目覚め）とポーズなしで1語として発音して、その反対語を知っているかと質問されても、すぐには答えがでてこないだろう。しかし、“abends rechts einschlafen!”とポーズをおいて言うならば、おそらく“früh links erwachen”と答えを思いつくかも知れない。

実際の会話においては、ポーズは、単語の切れ目のシグナルだけでなく、文の終わり、そしてさらには発言そのものの終わりのシグナルとして機能しているのである。書記では、ブランク、ピリオド、疑問符、感嘆符などがその働きを担うことになる。

3. テクスト種ウィットに見るドイツ語の形態論

3.1 単数形、複数形

ドイツ語の名詞の多くは、単数形と複数形の形が異なる。単数形を基にして複数形が作られるのだが、その派生の規則、パターンは、決して少なくない。一番分かりやすいのは、単数、複数と同じ形のものであるが、それほど数は多くない。最初の一つひとつ単数形と複数形を覚えていくのが得策ということになる。ある程度覚えた段階で、派生のパターンが理解できるようになる。その時点で、改めて派生のパターンを整理、確認作業をするというのが、効果的な学習法であると思われる。

“Wie heißt die Mehrzahl von Baum?” “Wald!” (Dietl 1986: 163)

もちろん、“Baum”の複数形は“Bäume”であって“Wald”ではない。しかし、意味的には、そうであると言ってもいい。木がたくさんあるところが森だからである。日本語においては、「森」という漢字そのものが「木」が複数集まって成り立っている。ドイツの子供も同じような考えをしたわけである。

3.2 複合語

日本語と同じように、ドイツ語は名詞を複数つないで一語とすることができる。その場合、その複合語全体の文法的性質は、一番最後の名詞に従うことになる。名詞を単純に結合して複合語が成り立つ場合(Schlafzimmer <Schlaf + Zimmer)と、接合辞が必要となる場合(Arbeitszimmer <Arbeit + s + Zimmer)もある。単数形だけでなく、複数形となって結合される場合もある(Frauenzimmer < Frau-en + Zimmer)。ついでながら言うと、接合辞の違いが地域的な差を示す場合もある。オーストリアではSchweinsbratenだが、ドイツではSchweinebratenである。

Polizist Meier zischt durch die Gegend und sucht einen Ladendieb.

Da fragt er die Gemüsefrau am Hauptmarkt: “haben Sie einen Ladendieb gesehen?”

“Einen Ladendieb?” sagt die Gemüsefrau. “Nee, hier ist keiner mit einem Laden vorbeigekommen.”

(Dietl 1988: 207)

“Ladendieb” はふつうには「万引き」の意味で理解される。つまり、“Laden” と “Dieb” の関係は、場所と行為者の関係として捉えられている。しかし、市場で野菜を商っている女性は、“Dieb” と “Laden” の関係を行為者と行為の対象と捉え「店そのものを泥棒した者」という意味で理解して、「店を担いでいった人などいないよ」と警官に答えている。

複合語を形成する語相互の関係の理解は、現実の対象についての知識を前提とする。言語レベルの関係はあくまでも可能な関係でしかない。複合語のおもしろさは、いったん固定した意味以外にも、さまざまな可能性が想定できる点にある。“Gemüsefrau” (野菜を商っている女性) という複合語にしても、複合語形成の論理からすれば、「野菜を商う女性」だけでなく、「野菜からできた女性」であっても不思議はない。ウィットの落ち自体、“Gemüsefrau” が「野菜を商う女性」であれば、“Ladendieb” のほうも「店そのものを泥棒する者」と理解できるという論理に基づいている。

ウィットは、通常の言語理解の盲点、ふつうにも思いもつかない点に気づかせてくれる。そこにもまたウィットのおもしろさ、笑いを誘う要因がある。

3.3 派 生

“Mann, Ede. Dich hab ich ja eine Ewigkeit nicht mehr gesehen!”

“Ich war ja auch fünf Jahre weg!”

“Fabelhaft!”

“Nein. Einzelhaft!” (Bornheim 1983: 247)

ドイツ語では、接頭辞あるいは接尾辞を付加することによって、さまざまな語を作り出すことができる。たとえば、次のウィットに出現している接尾辞“-haft”は、基本的には、名詞が指示している対象が持っている性質を持ったという意味の形容詞を派生する。“Fabel” (童話、おとぎ話) から派生された“fabelhaft”は、従って、「童話のような、すばらしい」という意味になる。しかし、一見同じ接尾辞による派生と思われる“Einzelhaft”は、“Einzel”に接尾辞“-haft”を付け加えることによって派生されたのではない。名詞“Haft” (逮捕) に形容詞“Einzel”を付加することによって作られた“Einzelhaft” (独房) という名詞なのである。エーデは実際は5年間刑務所の独房暮らしをしてきたのであるが、エーデの友人は「5年もの長期休暇をとっていたとは、なんとすばらしい」と誤解したのである。その対照が、このウィットの落ちとなっている。

4. テキスト種ウィットに見るドイツ語の統語論

4.1 品 詞

動詞、名詞、冠詞、副詞、形容詞、接続詞といった品詞の区別は、第一義的には統語機能に基づいてなされている。品詞の取り違えを落ちとしているウィットも数多い。

疑問代名詞と人称代名詞

Der Lehrer sagt zu einem Schüler: “Nenne mir zwei Pronomen!” Der Schüler wacht auf und sagt: “Wer, ich?” (Spier 2005: 69)

先生は「代名詞を2つあげなさい」といっているのだが、居眠りしていた生徒は突然当てられたので、びっくりして“Wer, ich?”（誰、僕？）と答えたのだが、それがたまたま正解だったということである。

所有形容詞、否定の冠詞

Die Schüler müssen im Deutschunterricht einen Aufsatz schreiben. Das Thema ist: “Unser Hund.” Ein Schüler schreibt: “Unser Hund. Wir haben keinen.” (Spier 2005: 69)

先生は、それなりの長さの作文を期待したであろう。しかし、一人の生徒が提出した作文は、“Unser Hund”（うちの犬）という課題とそれに続く一つの文だけであった。犬を飼っていないのであれば、課題に答えるような作文はできないのは当然である。先生の当然の仮定を作文そのもので否定している形だが、そこはこの生徒の知恵あるいはずるがしこさのいずれというべきであろうか。

固有名と副詞

Erbonkel Karl Meier-Niemeier ist verstorben. Die weitverzweigte Familie findet sich zur Testamentseröffnung ein.

Man macht sich bekannt: “Gestatten, ich heiße Niemeier.”

Darauf der andere: “Komisch, ich heiße immer Meier.” (Kunsmann 2003: 107)

“Ich heiße Niemeier” という発言にある名前 “Niemeier” を、統語的に同音のつながりである “nie Meier” と分析して、“Ich heiße nie Meier.”（私はマイヤーという名であったことはない。）と理解して、「おかしいですね。私はずっとマイヤーという名ですが。」と答えているのである。遺言状を開封するにあたって、遠縁過ぎているというようなことになれば、遺産相続に与る権利はなくなるかも知れないし、面倒な事態になる可能性もないとは言えない。落ちそのものは音声レベルも当然ながら関わっている。普通は名前としてのみ意識されている “Niemeier” が、出現する文脈によっては異なった統語構造に組み込まれて違った解釈を受けるということは、少々盲点を突かれるということになる。「なるほど！」と得心することになる。誤った構文分析を行った結果、統語カテゴリーを取り違えているのである。

4.2 文構造の取り違え

誤った句構造分析

Lehrer: “Weißt du, wie lange Fische leben?”

Schüler: “Wahrscheinlich genauso wie kurze.” (Valence 1995: 11)

誤った構文分析に依拠した落ちである。先生は、一般的に魚の寿命について質問したのである。(そのような質問に対して答えることができるのかどうか、疑問ではあるが。)しかし、生徒は、魚の生態に関する質問、つまり「長い魚はどのような生息の仕方をしているか」という質問だと理解して答えているのである。先生の質問は、“(((wie) (lange)) (Fische) (leben)?)”と分節されなければならない。しかし、生徒は、“((wie) ((lange)(Fische)) (leben)?)”という具合に分節して理解したのである。統語のレベルにおける落ちである。

句あるいは文なのか

Das Telefon klingelt bei Jens-Detlev Zietz. Er meldet sich: “Hier Zietz!”

Stimme in der Leitung: “Dann schließen Sie doch das Fenster!” (Reitberger 2003: 46)

電話での対応が問題となっているのだが、日本語では「もしもし」と切り出すが、ドイツ語圏ではすぐさま自分の名前をいう。このウィットの落ちは、ツィーツ (Zietz) という人名と “Hier zieht’s (=zieht es)” (ここは、すきま風があって、スースーする) という表現の “...zieht’s” が、音声的に同じであるという点にある。

4.3 動詞

現在

Die Lehrerin konjugiert: “Es heißt: Ich rufe, du rufst, er ruft, sie ruft, es ruft, wir rufen, ihr ruft, sie rufen. Moritz, wiederhole!” Moritz: “Alle brüllen!” (Dirx (Hrsg.) 1996: 38)

動詞の現在人称変化の学習である。動詞の語幹に、それぞれの人称変化語尾 “-e” (1人称単数)、“-st” (2人称単数)、“-t” (3人称単数)、“-en” (1人称複数)、“-t” (2人称複数)、“-en” (3人称複数) を付加して、それぞれの変化形を作るというのがドイツ語の規則である。先生はそうのように説明し、モーリッツに繰り返すよう指示した。しかし、モーリッツは、少々横着者なのか、動詞の意味をちゃんと理解したからなのかは判然としないが、僕も、きみも、あの子も、この子も叫ぶのであれば、結果として “Alle brüllen” (みんなが叫ぶ) ことになると答えたのである。動詞の現在人称変化についての説明でもあるが、他方、“rufen” と “brüllen” という動詞の意味的な違いが分かりやすく提示されているウィットでもある。

過去

Fragt der Lehrer: “Was ist die Vergangenheitsform von ‘der Mensch denkt, und Gott lenkt’?” Darauf ein Schüler: “Der Mensch dachte, und Gott lachte!” (KinderWitze 2003: 79)

“denken” の過去形が “dachte” であることは、この生徒は知っていたのだろう。そしてその変化パターンに従って、“lenken” の過去形が “lachte” になると推論したのである。つまり、類推 (アナロジー) である。しかし、言語の文法はそうのように完全に規則的ではない。推論によって作り出した “lachte” という形は “lachen” (笑う) という動詞の過去形である。“lenken” の

過去形はただしくは“lenkte”とならなければならない。

生徒の無知を笑うことができよう。しかし、他面、無意識に正しい形式を作り出しているわれわれの言語能力が、複雑な規則から成っているという事実にも気づかされる。作り出された形式は、文法的には間違いということにはなっても、もう一つの理解の過程が存在するという認識をもたらしてくれるのである。

未 来

Der Lehrer hat mit seinen Schülern lange über das Thema “Zeit” gesprochen und hat ihnen die Begriffe “Gegenwart”, “Vergangenheit” und “Zukunft” erklärt. Zum Schluss fragt er einen Schüler: “Wenn ich nun sagte: ‘Ich bin krank’ - was ist das für eine Zeit? “Eine sehr schöne Zeit, Herr Lehrer!”, antwortet der Schüler. (Spier 2005: 71)

時間について説明した直後であれば、“Ich bin krank”（病気です）という文は、現在、過去、未来、いずれについてのものか、というのが先生の質問であることは自明であろう。しかし、生徒の思考は別方向を向いている。授業が無く、学校が休みとなることが願いなのである。先生が「病気だ」というのであれば、授業が無くなり、“Eine sehr schöne Zeit”（とつてもすばらしい）のである。時間をかけて説明してきた先生の努力は何の甲斐もなかったのである。

4.4 話法の助動詞

Ein Urlauber aus der >DDR< kommt in Belgrad mit einem Ungarn ins Gespräch: “Mir geht es gut. Ich habe einen sicheren Arbeitsplatz, ein geregeltes Einkommen, hab’ genug zu essen, fahre einen Wartburg, ich kann nicht klagen!”

Meint der Ungar: “Das hab’ ich doch auch alles, aber ich kann klagen...!” (Bornheim 1983: 256)

時代は東西ドイツ統一以前である。ユーゴスラビアのベオグラードで休暇を過ごしているDDRの人が、ハンガリーの人と出会い、言葉を交わした。DDRから来た人は、仕事も確保され、収入もあり、自家用車もあり、誇らしげに、“ich kann nicht klagen”（なににも不平を言うことはない）という。ハンガリーの人も同じレベルの生活状況であるが、“ich kann klagen”（不平を言うことはできる）という。かつて東欧の社会主義国の中では一番生活レベルが高いといわれたDDRであった。そしてまた建前としては社会主義のイデオロギーをしっかりと内面化していた。「何も不平を言うことはない」という言葉からはそのような意識が読みとれる。それに対して、ハンガリーの人は、それほど誇るべきレベルの生活でもないと考えており、DDRの人の自足的な考えを批判している。

話法の助動詞“können”は、本来「～できる」という意味を持っている。DDRの人の発言は、生活が十分に満ち足りているので、不平を言うことはできない、といっているのだが、ハンガリーの人は、あくまでも言葉の意味に従っていうならば、不平、不満を言う能力はある、ということ

をいっている。あるいはもっと深読みするならば、DDR では不平、不満があっても、その不満を口に出して言うことができない、しかし、ハンガリーでは意見として表明することができる自由がある、ということなのかも知れない。

5. テキスト種ウィットに見るドイツ語の意味論

5.1 語の意味論

意味のレベルにおける落ちは、語の多義性、フレーズの多義性に分けることができる。多義語、同音異義語、句の多義性を落ちとするウィットは数多い。本論文では、コロケーションも句の多義性に含めて取り扱うことにする。

5.1.1 動詞の意味論

Petra: "Na Klaus, wie geht dein neues Fahrrad?" - Klaus: "Ein Fahrrad geht nicht, das fährt!" - Petra: "Na gut, wie fährt dein Fahrrad?" - Klaus: "Es geht!" (Ulrich 1980: 216)

イタリア語では、日本語と同じように、「行く」という動詞は、andare 一語があるのみである。しかし、ドイツ語では「行く」という場合、その手段が問題となる。まず、「歩いて行く」か「乗り物を使っていく」を区別する。歩いて行く場合は、“zu Fuß gehen”である。乗り物を使っていく場合は、さらに飛行機かそれ以外かを区別する。飛行機で行く場合は“fliegen”、自動車や列車の場合は“fahren”ということになる。上のウィットは“gehen”と“fahren”の使い分けをベースにして、“es geht”（問題がない、支障がない、OKだ）という慣用的な表現を落ちとしている。

5.1.2 同音異義語

Dienstbeflissen erkundigt sich der Ober: "Essen Sie gern Wild, mein Herr?"

Der Angesprochene wehrt entschieden ab: "Im Gegenteil, mein Lieber, stets ruhig und besonnen..." (Bornheim 1983: 282)

名詞「野生の動物」と副詞「行儀悪く、粗野に」という2語は、書記では“Wild”と“wild”とかき分けられることになるが、実際の音声は同じである。しかも、“Essen Sie gern Wild?”という文構造からはどちらとも理解できる。レストランで乱雑な食べ方をする人など普通にはいなくても、あえてそのような質問をするウェイターもいないであろうが、ウィットの世界ではそれもあり得る。「行儀悪く食べるか」と聞かれた客は、当然ながらむっとして答える、「いやそんなことはありませんよ、いつでも静かに味わいながら食べていますよ。」

5.1.3 多義語

An der Rezeption verlangt Meier seinen Zimmerschlüssel.

"Sind Sie hier Gast?" erkundigt sich der Portier.

"Nein", erwidert Meier missmutig. "Ich muss hier pro Nacht Ein-hundert-drei-und-neunzig

Mark bezahlen. Ich frage Sie, tut man das einem Gast an?" (Kunsmann 2003: 140)

ホテルのフロント係は、「当ホテルにご宿泊されているのですか。」つまり、「当ホテルの宿泊客ですか。」という質問をしたのであるが、マイヤー氏は、「宿泊客」ではあっても、「招待客」という意味で理解して、「招待客に1泊193マルクも支払わせるなどということをするのか。」と、フロント係にねじ込んでいるのである。“Sind Sie hier Gast?”（当ホテルにお泊まりのお客さんですか。）というのは、ほとんどルチーン化した接待表現であり、もう一つ別の解釈があるなどとは普段考えもしないが、確かに、“Gast”の本来の意味は、「招待客」なのであり、「お客」さんに宿泊料を支払わせるなどということは、常識に反するのである。資本主義に基づく利潤追求社会では、本来の言葉の意味もねじ曲げられてしまっているのである。

“Na, wie finden Sie mein neues Fachbuch, Herr Kollege?”

“Tja, trotz der vielen Quellen sehr, sehr trocken.” (Kunsmann 2003: 281)

“Quelle”には、「泉」、「原典」という意味がある。たくさんの泉があるにもかかわらず、無味乾燥な本であるという批判である。そして“trocken”にも、“Quelle”がもっている2つの意味に対応して、「乾燥している」「無味乾燥である」という2つの意味がある。それぞれの対応する意味をあえて交錯させて理解している点に、このウィットの落ちがある。

5.1.4 コロケーション

Kennen Sie auch die Gefährlichkeit des Frühlings: Die Salatköpfe schießen...die Sonne sticht...die Bäume schlagen aus...und der Rasen wird gesprengt...! (Bornheim 1983: 243)

特定の語としか結びつかない語がある。それを連語（コロケーション）という。ドイツ語では“feste Verbindung”（固い結合）という語がそれに当たる。たとえば“Initiative ergreifen”（イニシアチブをとる）や“lügen wie gedruckt”（臆面もなく嘘をつく）がそうである。コロケーションと機能動詞結合たとえば“Entscheidung treffen”（決断する）といった固定的な表現との距離は短い。機能動詞結合の場合は、機能動詞が動詞本来の意味をほとんど喪失して、名詞の方が動詞としての中心的な意味を担っている。しかし、コロケーションの場合は、まだ動詞の比重が大きい。

春には草木が芽吹く、太陽の日差しがきつくなり、目に差し込む。芝生には水がまかれる。しかし、そこで使われている動詞“schießen”、“stechen”、“ausschlagen”、“sprengen”は、それぞれ「射る」「刺す」「たたき出す」「爆破する」といった物騒な意味も持っている。それぞれの動詞の多義性とコロケーションが落ちに絡んでいる。

5.1.5 多義的な句

フレーズそのものが多義的で、そのような言語表現の曖昧さを落ちとしているウィットがある。

In letzter Minute kommt noch ein Fan an die Kasse des Stadions, um eine Eintrittskarte

zu kaufen. “Tut mir leid, mein Herr”, erklärt die Kartenverkäuferin. “Das Stadion ist bis auf den letzten Platz ausverkauft.” “Gut, dann geben Sie mir den!” (Kunschmann 2003: 129) “bis auf den letzten Platz” というフレーズは、「一席残らず」と「1席を残して」という相反する2つの意味を持っている。日本語訳では「最後の1席まで」という具合に曖昧なままにしておくこともできる。競技場の入場券販売係の女性は、「一席残らず」の意味で言ったのであるが、試合開始間際に駆けつけたファンは、「1席を残して」の意味で理解して、「その券をくれ!」といている。

ところで、このウィットに出てくる“Stadion”(競技場)は、ドイツ語のウィットであるので、サッカー場だと理解されるのが普通であろうが、日本ならば野球場かサッカー場か、どちらとも言えないということになろう。同じ「競技場」を指すといっても、どの競技が一般的かということで、実際の理解は食い違う場合も少なくない。とりわけ、言語が異なる場合は、そのような誤解の可能性は大きい。外国語理解には「菟菟問答」が付きまどっているということ忘れてはならないだろう。表現形式は同じでも、送り手と受け手それぞれが全く別のことをその同じ表現の意味として理解しているのである。

5.1.6 イディオム表現

イディオム(慣用句)は、字義通りの意味と、慣用的な意味の2つを持っている。あえて字義通りの意味でイディオム表現を理解する点に落ちがあるというウィットも多い。ウィットのテキストとイディオム表現の関係については、少なくとも3つを区別することができよう。一つ目の部類は、ウィットのテキストにイディオム表現が出現しているが、落ちとは直接関係していないものである。2つ目は、イディオム表現がウィットの落ちとなっているものである。3つ目は、ウィットのテキスト構成そのものがイディオム表現に基づいている場合である。

5.1.6.1 ウィットのテキストにイディオム表現が出現しているもの

これは、数多い。筆者は、これまでイディオム表現を含むウィットを素材とすることによって、より効果的なイディオム学習・教授を展開することを考えてきた。従って、本論文では、1例のみあげる。

“Euer Buchhalter schiebt aber eine ruhige Kugel!”

“Das kann man wohl sagen. Wir haben ihm vor zwei Wochen die Schubladen seines Schreibtisches zugemagelt, und er hat es bis heute nicht gemerkt!” (Kunschmann 2003: 72)

“Euer Buchhalter schiebt aber eine ruhige Kugel!” に含まれている“eine ruhige Kugel schieben”という言い回しは、「それほどがんばって仕事をする必要がない」という意味である。帳簿係の机の引き出しを2週間前に釘付けにして動かないようにしたのに、未だに気付かない。ということは、その間引き出しをあけることさえせず、まったく仕事をしていないということになる。このウィットは、官吏の怠惰を皮肉るものとして、さまざまなバリエーションがある。

5.1.6.2 イディオム表現がウィットの落ちとなっているもの

“Der Bauchredner ist toll!” schwärmt die Seiltänzerin.

“Warum?” will der Stallbursche wissen.

“Er redet, wie ihm der Nabel gewachsen ist.” (Kunsmann 2003: 30)

ウィットの落ちとなっているのは、太字下線の部分であるが、この表現は「遠慮会釈なく、しゃべる」という意味のイディオム表現 “reden wie einem der Schnabel gewachsen ist” にある “der Schnabel” (くちばし) を “der Nabel” (臍) に変えたものである。腹話術使い (Bauchredner) だから「嘴」ではなく「臍」というわけである。ドイツ語では “Schnabel” と “Nabel” が共通の音節をもっている点も、駄洒落となり、落ちの効果を強めている。

5.1.6.3 ウィットのテキスト構成そのものがイディオム表現に基づいているもの

それほど数多くはない。イディオム学習のための素材としては、より高度な段階で投入可能といえるものである。ウィットの種類という観点からは、「イディオム表現がウィットの落ちとなっているもの」と同じグループに含めてもいいのだが、問題となっているイディオム表現そのものが明示的にウィットのテキストには提示されていない点が、上述の2つの部類のウィットとは異なる。ウィットのテキスト理解に基づいて、当該のイディオム表現を再構成する能力 (イディオム能力) が受け手の側に要求される。その意味では、ウィットのテキストは受け手に対して知的に挑んでいるとも言え、落ちが理解できた時点においては受け手は知的な満足を感じるようになる。

Über den Zoo fliegt ein Mückenschwarm. Sagt eine Mückenmutter zu ihrem Jüngsten: “Sieh dir dort unten einmal die Elefanten an. Das sind die Tiere, die aus uns gemacht werden.” (Fuhrmann (Hrsg.) 1998: 215)

このウィットは、いずれも “aus einer Mücke einen Elefanten machen” (蚊から象を作る、すなわち話を上げさにする、針小棒大) というイディオム表現を基にしている。そしてまたこのイディオム表現を知っているのはじめて、このウィットのおもしろさ分かる。蚊と象、この両極端の大きさの生物の対照がおもしろさにつながっている。象と鼠が登場するウィットも、その構造は同じである。のっぽとちび、やせっぽちとふとっちょ、ともかくも両極端の対照は、それだけが笑いを誘うのである。

5.1.7 ことわざ

ことわざは、生活の知恵、人生訓等を文の形で伝えるものである。記憶しやすいうように言語表現としてさまざまな工夫が凝らされており、それを対象に分析することも興味深いことではあるが、ここではことわざをウィットの落ちとしているものを、いくつか取りあげることにする。ことわざを含んだウィットについても、イディオム表現の場合と同じように、原則的には、3つの部類を区別することができるが、それぞれの例が数多くあるわけではない。

5.1.7.1 ウィットのテキストにことわざが出現しているもの

“Wie kommst du zu der Behauptung, Sprichwörter würden nicht stimmen?”

“Na, nimm doch mal den Spruch ‘Was ich nicht weiß, macht mich nicht heiß!’

“Stimmt es etwa nicht?”

“Ich stehe vor dem Examen, nicht macht gerade das heiß, was ich nicht weiß.” (Bornheim 1983: 466)

“Was ich nicht weiß, macht mich nicht heiß!” は、「自分が知らないことは、自分を熱くすることはない」、つまり「知らぬが仏」ということである。しかし、受験生にとってはそうではない。まさにその逆こそ正しい。つまり、知らない事柄が試験問題に出てきたらどうしようと考え、かっかしてくる、「知らないことがまさに熱くする」というわけである。ことわざの逆を主張している点に、このウィットのおもしろさがある。

5.1.7.2 ことわざがウィットの落ちとなっているもの

Sie sollen einen Aufsatz schreiben zu dem Thema: “Ehrlich währt am längsten.”

Andreas weiß Bescheid: “Wenn ich meinen Aufsatz ehrlich ganz selber schreibe, brauche ich am längsten”, schreibt er. (Dietl 1986: 81)

“Ehrlich währt am längsten.” という諺は、直訳するならば「正直が一番長く続く」、つまり「正直が最上の策」という意味である。逆にいえば、「下手なうそは付かない方がいい」といったことになろうか。先生は、体験を踏まえた作文を書くように、という指示を出したのだろう。しかし、アンドレアスは、ことわざが本来意味しているのとは別の理解をして、「正直に自分で作文を書くと、長くかかる」と書いたのである。アンドレアスの理解の仕方は、あながち、まったくの見当違いとも言えず、一面の真理を言い当てている。「正直者が馬鹿を見る」ということも、残念ながら現実においては、決して希ではないからである。

5.1.7.3 ウィットのテキスト構成そのものがことわざに基づいているもの

Auf einem alten Dampfer begegnen sich zwei Ratten. Sagt die eine zu der anderen:

“Kommste mit? Wir spielen Schiffeversenken!” (Bornheim 19883: 9)

鼠は危険をいち早く察知して船を捨てて逃げるといわれるが、その事を表現している “Ratten verlassen das sinkende Schiff” という言い回しが、このウィットのテキスト構成を支えている。

6. テキスト種ウィットに見るドイツ語の語用論

6.1 人称代名詞

Fahrscheinkontrolle im Bus. “Ne, mein Junge, für einen Kinderfahrschein bist du schon viel zu groß”, schimpft der Kontrolleur. Der junge bissig: “Na, dann hören Sie aber auch gefälligst auf, mich zu duzen!” (Müller-Scherz 1987: 12)

ドイツ語の文章は、主部と述部から成り、主部は名詞句から成り、名詞句は名詞や代名詞から形成される。代名詞は、すでに話題にされた対象を名詞そのもので言及する代わりに、いわば省略形として用いられるものである。という説明が人称代名詞に関する統語的な説明ということになろう。

名詞や人称代名詞は、統語的な役割に応じて、Nominativ（主格）、Genitiv（属格）、Dativ（与格：間接目的格）、Akkusativ（対格：直接目的格）という4つの変化形式（格変化）がある。というのが、形態論に関する説明ということになる。

さらに、ドイツ語では話し手（送り手）を指す1人称、聞き手（受け手）を指す2人称、送り手、受け手以外の第3者を指す3人称が区別されており、それぞれに単数と複数を示す表現形式がある。そして、2人称についてはさらに、Sie と Du の2つがある。ここまでが意味論的な説明になろう。

初対面の人や通りすがりの見知らぬ人に呼びかけるときには Sie を用いる。それに対して、親しい人や子供に対しては、Du を用いる。大人であっても、見知らぬ人に向かって Du を使うことは、相手をさげすんだ言い方になる。このような使い分けに関する説明は、語用論に属するものといえよう。

上のウィットは、2人称の代名詞 Du と Sie の使い分けを落ちとしている。本来大人用の乗車券を買うべきところ、子供用の乗車券を持っていた若者が、車掌から叱られたのだが、悪びれるどころか逆切れして、大人というなら、それなりの言葉遣いをしてもらいたいと毒づいているのである。

6.2 テクスト種ウィットに見るドイツ語のコノテーション

ののしり言葉は、語のコノテーション、感化的意味内容に関わっている。本来的には、意味論に属するものであるといえるが、本論文では、たとえ自らは使用することがまずないだろうとはいっても、実際にはドイツ語圏では多用されているののしり言葉について知っておくことは必要事項であると考え（植田 2000参考）。実際の言葉の使用においては、認知的意味内容を理解するだけでなく、コノテーションに注意を払うことが重要なのである。そのような意味で敢えてここで、ののしり言葉を取り扱うことにする。ドイツ語においては動物（Schwein、Kamele など）や事物（Flasche など）、食物（Würstchen など）、道具（Beißzange など）がののしり言葉として使われる場合が多い。もちろん、どういう語であっても、ののしりの意図で使用することはできるであろう。話し手の主観に大きく依存している。本論文では、スペースの都合で、2つの例を挙げるにとどめる。

Herr Schröder erzählt seiner Frau: “Es gibt Kamele, die können zehn Tage arbeiten, ohne zu saufen.” “Es gibt aber auch Kamele”, seufzt die Frau, “die können zehn Tage saufen,

ohne zu arbeiten.” (Fuhrmann (Hrsg.) 1998: 82)

シュレーダー氏は、「駱駝が何も飲まないで10日間も働くことができる。」ということ、驚いた調子で奥さんに言う。これに対して、奥さんは溜息をつきながら、「10日間飲むばかりで、ちっとも働かない駱駝だっているわよ。」と皮肉を言う。このウィットには、交錯法というレトリックが用いられていることが落ちの効果を高めている。

Herr Schmidt hat im Wohnzimmer einen Nagel in die Wand geschlagen, um ein Bilde aufzuhängen. Aber er hat den Nagel krummgeschlagen.

“Geh doch mal”, bittet er seinen Sohn, “und hol mir die Beißzange.”

“Tante Berta”, ruft der Sohn durch die Tür, “komm doch mal, Vati möchte dich sprechen.”

(Fuhrmann(Hrsg.) 1998: 73)

居間で壁に絵を掛けようとしていたシュミット氏、釘を打ちそこねて曲げてしまった。「物置に行って、釘抜きを取ってきてくれ。」と息子にいったが、息子は、いつも父親がおばさんのことを“Beißzange”（がみがみ屋）といっているの、てっきりおばさんのことだと理解したのである。裏での言行がばれたというわけである。あるいは、息子はちゃんと父親の発言の意味をちゃんとわかっていて、父親をへこませてしまおうという作戦だったのかも知れない。

6.3 テキスト種ウィットに見る発話行為

表現の多義性にもとづく落ちがしばしば観察される。そして、その表現は、語、句、文という3つのレベルに分けることができる。文レベルについては、統語論のレベルというよりも、発話の意図といった語用論のレベルに属するものといえる。質問、発話の真意の理解が一義的でないという点に落ちが依拠している場合が多いからである。もちろん、現実の発話状況を考え合わせると、一義化されるというのが、通常であろう。しかし、ウィットには、そのような発話の意図の取り違えを落ちとしているものも多い。

Im Musikunterricht. Der Lehrer fragt Sabine: “Kannst du den Kammerton A singen?”

Sabine singt ein A.

“Und nun G!”

“Auf Wiedersehen!”, sagt Sabine und geht. (Reitberger 2003: 32)

先生は、「さらにG（ソ）の音を出してごらん」、という意味の指示を出したつもりであったのに、ザビーネはすでに課題を終えたと理解し、「帰りなさい」という指示だと理解したのである。発話の意図を取り違えているのだが、動詞“gehen”の命令形がGと同音の“geh”であるのを、ザビーネは自分に都合のいいように理解して、「さようなら！」と言って教室を出ていったのである。

6.4 決まり文句 (Routineformel)

われわれは、それほど深く考えることもなく、決まり切った文句を多用している。それらの決まり文句は、認識的な情報伝達を眼目とするものではなく、いわば言葉交わし機能、毛づくろいの機能を果たしているものとも言える。言葉によるスキンシップであるとも言える。例えば、挨拶言葉である。職業によっては、「おはようございます」は、必ずしも午前中に交わされる挨拶言葉ではない。その日始めて会ったときに交わす言葉となっている。会うたびごとに挨拶を交わすところもあれば、始めて会ったときだけ挨拶を交わすところもある。日本語では「おはよう」「こんにちは」「こんばんわ」「おやすみ」と4つそろっている。ドイツ語は日本語と同じである。しかし、イタリア語では朝起きたときに交わすのも、日中交わす言葉も同じで“Buon giorno!”である。英語では「こんにちは」に相当する表現はない。Good morning! は午前中の挨拶であり、Good afternoon! は、午後の挨拶であり、日中通して使用可能な挨拶言葉自体はない。Hallo! という万能表現がその機能を果たすことになる。

Und hier ein paar Abschiedsworte der verschiedenen Fakultäten:

Der Augenarzt sagt: “Auf Wiedersehen!”

Der Ohrenarzt sagt: “Auf Wiederhören!”

Der Urologe sagt: “Verpiss dich!” (Krüßmann/Hoppe 1999: 71)

目医者だから「さようなら」は「再び見ることを期して!」である。耳医者ならば当然「再び聞くことを期して!」である。それならば、泌尿科医はどう言うかが落ちとなっている。

6.5 状況語 (レジスター)

状況に応じて、言葉遣いを変えるというのは、敬語に限らない。若者言葉の特徴といわれる「ため口」もそうであろう。

“Papileinchen. Bitte, bitte schenk deinem Irmilein ein paar Mark!”

“Aber nur, wenn du dieses kindische Gerede sein lässt! Das ist ja furchtbar!”

“Hast recht, Alter. Rück die Kohlen raus. Aber heute noch!” (Dietl 1986: 104)

父親に小遣いをねだっているのだが、子供がかなり大きくなってまだ幼児言葉を使っていることに父親はぞっとしている。年齢相応の言葉遣いに改めたら、小遣いをやる、といわれた途端に、ため口を使っている。その言葉遣いのギャップの大きさ、対照が笑いを誘い込んでいる。

6.6 発話状況

同じ言語表現であっても、それが埋め込まれる言語外コンテキスト、言語内コンテキストによって、異なった意味を持つことがあり得る。ウィットにはそのようなコンテキストによる異なった解釈の可能性を落ちとするものがある。これもわれわれの通常の言語理解のあり方に目を向け、

硬直した理解のあり方に反省を迫るものといえる。言語表現は最終的にはある意味解釈を促す信号としての機能を果たしているに過ぎない。特定の意味解釈を強要するものではないのである。いずれの意味であるかの解釈は、受け手（読み手、聞き手）にゆだねられているのである。

Lehmans sind bei Bekannten zu Besuch. Es wird ein Wein serviert, der wirklich wie Essig schmeckt. Trotzdem hebt Herr Lehmann sein Glas und sagt:

“Ein Lob für die Gastgeberin! Ich muss sagen, der Wein schmeckt wirklich vorzüglich!”

Auf dem Heimweg fragt ihn seine Frau:

“Wie konntest du diesen ekelhaften Wein nur als vorzüglich loben?”

Darauf ihr Gatte:

“Ich habe ja nicht gesagt, der Wein ist vorzüglich, sondern ich sagte: Ich muss sagen, der Wein schmeckt wirklich vorzüglich!” (Kunschmann 2003: 139)

レーマン氏は、訪問先でいただいたワインがすばらしいとほめあげたのではない。「訪問先でもてなされたワインである以上、すばらしいとほめあげざるを得ない。」とittedだけである、と奥さんにいっているのである。レーマン氏が言った文章はそっくり同じであるが、訪問先の奥さんに対していったときと、自分の妻にいったときとは全く解釈が異なってくる。発言される場面の違いが解釈に及ぼす力が大きい例である。

他方、“müssen”という助動詞の意味をどのように解釈するかということでもある。この助動詞は、「ことの成り行きでどうしてもそうせざるを得ない、必然である」という意味を持つが、問題はこの助動詞が表現することになる「ことの成り行き」そのものである。つまり「ワインが事実としてすばらしいので、そういわざるを得ない」というのか、「もてなしと出されたワインであるので、社交儀礼上、すばらしいといわざるを得ない」というのか、その解釈は受け手（聞き手）に任されているのである。通常はこの表現がウィットにあるような場面でほめるための表現として使われるということから、訪問先の奥さんは当然賛辞として理解したはずであるし、レーマン夫人もそのように理解した。しかし、レーマン氏は、表現の曖昧性を巧みに利用して、礼を失しないような言葉を述べ、なおかつ心の中ではまずかったと考えているのである。

6.7 会話の公準

Ein Vertreter haut im Schreibwarenlagen mächtig auf den Putz: “Acht von zehn Deutschen benutzen diesen Kugelschreiber zum Schreiben.” “Interessant, und wozu benutzen ihn die übrigen zwei?” (Kunschmann 2003: 156)

このウィットは、グライスのいう「会話の公準」のうち、必要十分のことを言え、という格率に反している点に落ちがある。必要以上の情報を与えているために、その余剰情報を揚げ足取りされたのである。つまり、ボールペンは、書くためのものであることは自明である。それをわざ

わざ「10人のうち8人が、書くために用いる」と言った。それでは残りの2人は何のために用いるのか、という質問がなされたのである。他方、発言する際、どの部分にアクセントを置くかにも、このウィットの落ちは左右される。“zum Schreiben”の部分強調したため生じた疑問でもある。

6.8 テクスト種ウィットに見るレトリック

“Igittigitt! Kannst du dir etwas Ekligeres vorstellen als ein Haar in der Suppe?”, kreischt Sabine laut. “Und ob”, weiß Achim: “Suppe im Haar!” (KinderWitze 2003: 124)

上で挙げた罵り言葉としての駱駝に関するウィットにも見られたのだが、このウィットには交錯法というレトリック手法が使われている。食べる気をなくすものの代表といえば、「スープに入った髪の毛」というステレオタイプの発想を、くつがえしている点に、このウィットの面白みがある。そして、確かに「髪にかかったスープ」は面倒である。

7. おわりに

以上、「ドイツ語学習素材としてのウィット」という観点から、文法現象と理解できる事項を落ちとしているウィットの例をあげて、モデル的にウィットが有しているドイツ語学習素材としての有用性について考えてみた。実際のドイツ語授業においては、もっと多くのウィット例を取り扱うことが当然ながら必要となる。そしてまた収集したウィットを、さらに細かく文法事項に沿って分類整理する必要があるだろう。

ドイツ語学習素材、そしてさらにはドイツ語圏における言語文化教育に関する素材としてのウィットの持つ可能性について、調査、考察をさらに進めていくことになる。そのためのモデル的考察として本論文をひとまず議論に供することにした。

本論文では、さまざまな言語レベルにおけるウィットの落ちを観察し、それらがドイツ語学習項目に関わっているという点から、考察してきた。各言語レベルにおける落ちの観察は、自ずとウィットの落ちによる分類を結果する。そして、落ちによるウィットの分類の試みが目指すのは、最終的には、ウィットの落ちの一般的規定であり、ウィットを受容、享受が、受け手にとって、一体どのような意味を持つのかについて、考えることである。

その意味、意義は、結論的にいえば、固定しがちなわれわれの思考回路に風穴を開け、新しい思考回路を切り開き、思考を柔軟にし、新しい認識の可能性を開くというものである。ひとつのモチーフを繰り返し用いながら、常に新しいウィットが作り出され、語られる意味もそこにある。たとえば、ウェイターのウィットは、客がウェイターに苦情を言い、その苦情をいかに機知をもってウェイターがかかわすのか、というのが基本パターンであるが、どのように切り抜けるか、そのバリエーションを作り出すことに努力が傾けられていると言える。誰もが「なるほど!」と感心

するような機転の利いた返事を考え出すことによって、より思考が柔軟になり、発想の幅が広がり、ぎすぎすし、いがみ合った世の中になることを回避することができるのである。まさに、その意味で、ウィットは社会の潤滑油なのである。笑いは、身体的、精神的健康の源なのである。

もちろん、テキスト種ウィットを読書行為によって享受する場合は、以上述べたこと以外にさらに、落ちが理解できたというある種の知的満足が得られることも確かであり、テキスト種ウィットを単に消費財としてのみでなく、少々大げさな言い方になるが、ひとつの言語文化遺産として捉えることもあながちの外れではない。テキスト種ウィットを構成するモチーフそのものを新たに見いだすこと自体もそうであるが、既存のモチーフを使ってさまざまなバリエーションを作り出すことも、きわめて創造的な言語作品創出行為なのであり、テキスト種ウィットの享受は、文学作品の享受と原理的には同じ行為であるといつてよい。

注

- 1) 本論文は「言語文化教育素材としてのテキスト種ウィット—その潜在的可能性に関する基盤的研究」という課題の科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号:17520379)の交付を受けて筆者が行っている研究成果の一部である。
- 2) シュピエア(Spier 2005)は、外国語としてのドイツ語の授業において教育素材としてテキスト種ウィットを投入するという最近の試みであるが、基本的には、従来の考えに基づいている。ウィットのテキストの配列は内容・事項に沿って行われている。“Deutsch”(ドイツ語)(Spier 2000: 69-71)という見出しのもとにあがっているウィットのいくつかは、筆者の考えと同じ観点から取り上げられているものといえる。マンタイ/ポンヒン(Manthey/Ponchin 2004)は、さらに低学年の児童を対象にして、ウィットを素材とするドイツ語学習についての提案と素材を提供している。

参考文献

- Bornheim 1983: B. Bornheim (Hrsg.), *Das Superbuch der Witze*. Niederhausen/Ts.: Falken-Verlag.
- Dietl 1986: Erhard Dietl, *Die Witz-Rakete*. München: Franz Schneider Verlag.
- Dietl 1988: Erhard Dietl, *Der Witz-Ballon: Witz zum Abheben*. München: Franz Schneider Verlag.
- Dirx (Hrsg.) 1996: Jörn-Peter Dirx (Hrsg.), *SchülerWitze*. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag. (Ravensburger Taschenbuch 3013)
- Fuhrmann (Hrsg.) 1998: Olaf Fuhrmann (Hrsg.), *Super Kinderwitze*. Niedernhausen/Ts.: Bassermann'sche Verlagsbuchhandlung.
- KinderWitze 2003: *KinderWitze*. Geiseltasteig: KiKa Buch.

- Krüßmann/Hoppe 1999:** Dieter Krüßmann/Ulrich Hoppe, *1000 neue Witze zum Totlachen*. München: Wilhelm Heyne Verlag.
- Kunschmann 2003:** Doris Kunschmann, *Die besten Witze von A-Z*. München: Bassermann.
- Müller-Scherz 1987:** Hannelore Müller-Scherz, *888 tolle Kinderwitze*. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag. (Ravensburger Taschenbuch 54212)
- Reitberger 1996:** Reinhold Reitberger, *1000 × gelacht*. Ravensburg: Ravensburger Buchverlag. (Ravensburger Taschenbuch 54174)
- Manthey/Ponchin 2004:** Heike Manthey/Kristina Ponchin, *Rund um den Witz*. Kopiervorlagen für den Sprach- und Literaturunterricht. Horneburg/Niederelbe: Persen Verlag.
- Spier 2005:** Anne Spier, *Mit Witzen Deutsch lernen*. Eine Sammlung von 520 Witzen für den Sprachunterricht Deutsch als Fremdsprache/Zweitsprache. Berlin: Cornelsen Verlag.
- 植田 1981:** 「ウィットの言語学」、『エネルギー』7号、46-56頁。
- Ueda 1981:** 「Linguistik des Witzes」、『独仏文学研究』（九州大学教養部）31号、97-109頁。
- 植田 1998:** 「ウィットの中のヨーロッパ諸国民—ドイツを中心として—」、『かいろす』36号、19-63頁。
- 植田 1999a:** 「政治的カリカチュアとウィットに見るイディオム」、『広島大学文学部紀要』第59巻特輯号2（本文89頁）。
- 植田 1999b:** 「政治的カリカチュア、ウィットを素材とするイディオム学習に関する一考察」、『広島大学文学部紀要』第59巻、188-208頁。
- 植田 2000:** 「ドイツ語における罵り言葉について—共生言語学の観点から—」、『広島大学文学部紀要』第60巻、305-327頁。
- Ueda 2002:** Politische Karikaturen und Witztexte als Material zum Erlernen der idiomatischen Wendungen im Unterricht Deutsch als Fremdsprache. In: *Akten des X. Internationalen Germanistenkongresses Wien 2000*. Band 4. Bern u.a.: Verlag Peter Lang, S.111-118.
- Ulrich 1980:** Winfried Ulrich, *Der Witz im Deutschunterricht*. Braunschweig: Westermann.
- Valecne 1995:** Tom Valecne, *1000 tolle Schülerwitze*. Würzburg: Arena Verlag.
- Weinrebe 1979:** Helge M.A. Weinrebe, *Vom Umgang mit Witzen*. Frankfurt am Main: Verlag Franz Diesterweg.

Zur Einsatz- und Behandlungsmöglichkeit der Textsorte Witz im Unterricht Deutsch als Fremdsprache - Grammatik -

Yasunari UEDA

Das Ziel der vorliegenden Arbeit besteht darin, die Einsatz- und Behandlungsmöglichkeit der Textsorte Witz im Bereich der Grammatik im Unterricht Deutsch als Fremdsprache zu eruieren.

Witztexte werden oft im Sprachunterricht als Lehr-/Lernmaterial eingesetzt sowohl um die sprachlichen Eigenschaften der Textsorte Witz bewusst zu machen, als auch um den Grammatikunterricht abwechslungsreicher zu gestalten. Dabei stellt die Textsorte Witz typischerweise einen kurzen Text mit einer Pointe dar, die im günstigsten Fall zum Lachen führt.

Im Gegensatz zu den gängigen Vorschlägen zur Einsatz- und Behandlungsweise der Textsorte Witz werden in der vorliegenden Arbeit gezielt nur solche Witztexte behandelt, in denen die zu erlernende grammatische Eigenschaft als Unterrichtseinheit die Pointe des Witztextes bildet bzw. der Entfaltungsstruktur des Witztextes zugrundeliegt.

Anhand des folgenden Witztextes kann z. B. eine Konjugationsregel des deutschen Verbs einleuchtend erläutert werden:

Die Lehrerin konjugiert: "Es heißt: Ich rufe, du rufst, er ruft, sie ruft, es ruft, wir rufen, ihr ruft, sie rufen. Moritz, wiederhole!" Moritz: "Alle brüllen!" (Dirx (Hrsg.) 1996: 38)

Moritz sollte eigentlich auf die Anweisung der Lehrerin hin die Konjugationsformen des Verbs "rufen" im Präsens wiederholen. Dagegen antwortete er einfach "Alle brüllen". Moritz dachte, von einem semantischen Gesichtspunkt aus gesehen, ganz logisch, obwohl seine Antwort im Sinne der Lehrerin falsch war. An diesem Witztext könnte neben der betreffenden Konjugationsregel auch der semantische Unterschied zwischen den beiden Verben "rufen" und "brüllen" anschaulich erläutert werden.

In der vorliegenden Arbeit werden Witztexte daraufhin gesichtet und analysiert, auf welche sprachliche (phonologische, morpho-syntaktische, semantische und pragmatische) Ebene sich die jeweilige Pointe bezieht. Daran anschließend werden einige Überlegungen zu möglichen Behandlungsweisen angestellt, um Vorschläge zum vergnüglichen Erlernen von grammatischen Regeln der deutschen Sprache machen zu können.